

鈴と、小鳥と、それから私。みんなちがって、みんないい……か、そんなのきれいごとじゃないの。事実、私の筆箱は黒色で、宿題のノートは猫の柄で、こそこそしながらここに来ている。でも「みんなおんなじ」が基本法である日常は、絶対におかしいはずなんだ。

小さくため息をついて顔を上げると、本を運んでいた図書館の守り神と目が合った。

「どうじゃ、たまには詩集もよかろう。」

「うん。他のも読んでみようかな。」

詩集は、窓のそばの棚にある。雨粒が光るガラスの向こうに、薄青色の紫陽花がもこもこ咲いているのが見えた。たくさんの本、楽しそうな子ども、いそいそと飛び回る神様。紙と雨のにおいが混ざるこの場所が、私は大好きだ。ここでは、ほっと落ち着ける。一年一組の教室とはちがう。

流れ始めたドビュッシーの「家路」が、閉館時刻を告げる。私は新しく借りた詩集を鞆に入れ、神様に手を振ってから立ち上がった。視聴覚室や自習室からもぞろぞろ人が出てきた。学生から高齢者まで様々な人が訪れるこの図書館は、実は数年前に取り壊しの危機に直面していた。図書館を愛する人々の熱意によって存続することが決まり、今に至る。

「あ、桃お、宿題写させてー。」

翌朝教室に入ると、陽菜が私の席に、肘をついて座っていた。曇り空がさらに重くなったような気がした。自分のノートを人に見られるのは嫌だし、宿題くらい自分でやってよと思う。でも無理やり口角を挙げてノートを渡した。

「うわ、丸ばっかり。さすが根本桃！ 天才、神！ あ、凜華も見ろ？」

私の宿題を、陽菜のグループ——通称一軍女子の面々が取り囲む。並んだノートは猫柄の表紙だけじゃなく、中身までおそろいに染め上げられていった。おそろいなのはこれだけじゃない。黒色の筆箱も、通学鞆につけているストラップも、クリアファイルもみんなおそろいだ。私は猫より犬のほうが好きだし、黒よりピンクのほうが好き。でも自分を否定されるのが怖くて、そんなことは言えないのだった。

始業のチャイムが鳴り、陽菜や凜華が各々の席へと散っていく。窓の外では、さっきまでやんでいたはずの雨が、またしとしとと降り始めていた。

放課後、真っすぐ図書館へ向かった。校門前の桜の木が、濡れた葉を揺らしている。陽菜や凜華と初めて話したのは、ちょうどこの木の花が咲き始めた頃だ。通っていた塾で、この中学校に入学するのが私たち三人だけだったのがきっかけだ。入学してから他の子たちも加わって、桜が散り終わる頃には総勢六人のグループができ上がった。宿題を見せ合った

り、推しのアイドルについて語ったり、昨日見た動画の話をしたりと毎日にぎやかだ。でも最近、そのにぎやかさには少し疲れている。私はアイドルやモデルに詳しくないし、彼女たちが気に入っている動画の何がおもしろいのかもよくわからない。それでもノリの悪い子だと思われてのけ者にされるわけにはいかないから、毎晩芸能ニュースをチェックしたり、すすめられた動画を見たりと意味のない努力を重ねている。

図書館に入ると、本を抱えた神様が近づいてきた。

「おや、今日は部活じゃないのかい？」

「今週は体育館の工事があるからお休みなんだ。」

私は一応ダンス部員だ。一軍女子たちに誘われて、言われるがままに入部してしまった。もともとダンスに興味はないし運動神経もよくないから、もう最悪だ。体が思いどおりに動かず、一人だけはたから見たら盆踊りみたいになってしまふ。それに引き換え私以外の一軍女子は、この二か月でめきめき上達していて、夏の大会への出場が確定している。

「そうかいそうかい。ここに来る時間ができて良かったではないか。」

神様は私の肩をトントンと優しくたたいてから、奥のほうへすっと消えた。

本当は文芸部に入りたかった。でも、陽菜と凜華の会話がその気持ちにふたをした。部活動体験の日、文芸部の部室の前を通ったときのことだ。

「えー。文芸部だって。何それ、ダサッ。」

「読書って陰キヤと真面目がすることじゃないの？」

固く握った両手が冷たい。根本桃そのものが否定されたような気がして、涙がこぼれそうだった。そんなことはつゆ知らず、賛同の声が次々に上がる。

「わかるー。読書とか普通しないって。」

「桃もそう思うでしょ。」

うん。平静を装ってうなずいた。そう思うでしょ、は魔法の呪文だ。私に嘘をつかせる呪文。この集団の中では、自分の好きを主張するより偽りの好きを作ったほうがずっと楽だ。そうしておけば、少なくとも自分の居場所確保できる。けれども偽れば偽るほど、顔から感情が消え、まるで能面のようにになっていく自分がいる。

湿っぽくなった気持ちを吹き飛ばすように頭を振り、飴色に輝く本棚に向かって一冊の本を取り出す。『魔女の宅急便』、私が一番好きな本だ。元気になりたいときにはいつも、この本を手取る。私と同じ十三歳なのにひとり立ちして、いきいきと生活する主人公・キキは強い。私もキキみたいになれたらいいのに。

今日も「家路」が流れるまで図書館で過ごした。『魔女の宅急便』を手になっている私の周りを、神様が浮遊する。

「久しぶりじゃな、その本を借りるのは。確か昔、ビブリオバトルでも紹介していたのう。覚えておるか。」

もちろん。私が小学二年生のときに参加したイベントだ。ビブリオバトルは、参加者がおすすめの本の魅力を制限時間内に紹介し合う書評ゲーム。真っ先に手を挙げて発表したのを思い出す。あの頃はやりたいことは何でもやったし、好きなものは好きと言えた。誰に何と思われようと怖くなかった。

「お主は小さい時から、楽しそうにここで本を読んでいたなあ。」
しみじみと言う神様に笑い返して、私は図書館をあとにした。

翌日、天気予報は珍しく晴れだった。心なしか気分もさわやかだ。横の田んぼでは、そら豆みたいなアマガエルが喉を震わせている。ひなげしの花も、風に揺れて気持ちよさそうだ。軽やかな足取りで登校すると、靴箱の前で凜華に呼び止められた。

「ねえ、ちょっと桃、いい？」

いつになく彼女の表情が固い気がする。猫みたいな切れ長の目が、いつも以上に鋭い。声のトーンも暗い。

「昨日、図書館にいたよね、弟を迎えに行ったときに見かけたんだけど。」

凜華は壁にもたれかかる。

「桃さ、なんか夢中で本読んでたよね。読書は嫌いなんじゃないの。あれは嘘？」

クラスメイトが、私たちを横目で見ながら通り過ぎていく。凜華の声が聞こえたのだろう、陽菜が駆け寄ってきた。

「やめなつて。そんな小さなこと、どうでもよくない？」

よくないから、と凜華が静かに制す。

「うちは、嘘つかれたことより、桃が何考えてるか分からないのが嫌。いつも『うん』しか言わないし。陽菜もそう思うでしょ。」

始業のチャイムが重々しく鳴った。二人は私を残し、教室へと走っていく。天気予報はどこへやら、いつの間にか空は灰色で、生ぬるい風が吹いてきた。雨が降るかもしれない。

今日は授業の内容が、全然頭に入ってこなかった。頭が今朝のことではいっばいで、給食のシチューも喉を通らなかつた。降りそうでなかなか降りださなかつた雨は、六時間目の途中からついに暴れ始めた。放課後になつてもやむ気配がない。仕方なく私は、大雨の中に一歩踏み出し、駆けだした。急がないと、鞆の中身まで濡れてしまう。髪が顔に貼りついて邪魔くさい。湿った靴下が私のつま先を冷やしていった。滝のような夕立は、収まる気配を見せない。突然向こうの空に、赤紫色の稲妻が走った。

「一、二、さ、」

空を破るかのような轟音が、あたりに響き渡る。身を縮めながら角を曲がると、いつもの図書館が目に入った。入り口近くの大きな木が枝を振り回している。

中に飛び込むといつものように、ふわりと優しい紙のにおいが出迎えてくれた。ほっとして体の力が抜ける。

「お、お主、ずぶ濡れではないか。」

神様の声を聞いたら今朝のことを思い出して、また泣きたくなってきた。

「あのね、神様。実は……。」

自分の好きなものを伝えることへの恐怖。本当の気持ちを隠すことの辛さ。一軍女子の前で言えなかったのが不思議なくらい、自然と言葉が溢れてきた。神様は私の背中に手を当てて、ゆっくりと聞いてくれた。

「大変だったのう。」

「これからどうしたらいいんだろう。」

それはな。神様は音を立てずに舞い上がった。

お主は……。

「あの、もしかして神様と話したりする？」

振り返ると、うちの中学の制服を着た男子が立っていた。

「あ、三年二組の増田勇太です。一年の根本さんだよ。よくここで見かけるから、名前覚えてちゃった。」

「神様が見えるんですか。」

神様は、人間の目には見えないはず。……なぜか私には見えるんだけど。案の定、男子——増田先輩は首を横に振った。

「見えはしないけど、いるのは知ってる。気配も感じるんだ。神様には感謝している。俺が夢を見つけたのも、神様のおかげだ。」

神様の？

「俺は幼稚園生ころから生き物が好きだった。メダカとかカブトムシとかも飼ってたし。この図書館にも、図鑑を借りに毎週通った。外の木で、友達とセミ捕りもしたなあ。」先輩は目を細めて遠くを見た。

「でも小学校に上がったら、友達がみんなゲームに熱中し始めた。俺が虫捕りに誘うと、ゲーム機も持っていないだろって馬鹿にするんだよ。それが悔しくてゲーム機を買ってもらった。それからは毎日、そいつらと遊んでいたんだ。メダカや虫のことなんてすっかり忘れて。そんなある日、図書館からビブリオバトルのお知らせが届いた。あれ描いたの、神様だろ。」

うむ、と神様がうなづく。

「久しぶりにここに来て、懐かしい本を借りたら思い出した。俺が本当に好きなのはゲームじゃなくて、生き物なんだってことを。それで今、生物部が有名な東高校に行くために勉強してるんだ。」

一息ついて、先輩は姿勢を正した。

「ということで神様、俺頑張るから。合格できるように、どうかよろしく。」

うやうやしく手を合わせ、頭を下げた。神様がぷつと嘔き出す。

「いや、わしは図書の神なんじゃが……。」

「合格祈願は神社でしてくださいよ。神様、困ってますよ。」

私も思わず突っ込んでしまう。

「え、そこを何とか、お願いしますっ。」

しつこく頼み続ける先輩がおかしくて、私は笑いがこらえきれなくなってしまった。先輩も照れくさそうに頭をかく。いつの間にか雨はやんでいて、雲の隙間から明るい光が差し込んでいた。

私が本当に好きな色は、黒じゃなくてピンクだ。本当に好きな動物は、猫じゃなくて犬だ。そして私が本当に好きなことは、アイドルグループの曲を聞くことでも動画を見ることでもなくて、本を読むことだ。

やっぱり文芸部に入ろう。ダンスは私がやりたいことじゃない。一軍女子のみんなには、明日伝えよう。考えただけで胃がキュッと縮むけれど、なんだか大丈夫な気がする。神様がいつものように、肩を優しくたたいてくれた。

次の日、私は陽菜や凜華たち五人の前に立っていた。

「あ、あの、今まで黙っててごめん。私……本当は読書、めっちゃ好きなんだ。だから、文芸部に入ろうかなって考えてる。」

凜華はまた怒るだろうか。陽菜はどう思っているんだろう。怖すぎてみんなの顔が見られな
い。

「あと実は私、犬派だし、一番好きな色はピンクで、それから……。」

一瞬の沈黙のあと、凜華の夏空みたいに明るい声が出た。恐る恐る顔を上げる。

「うちも言いすぎた、ごめん。でも、桃の本音が知れて嬉しい。実はうちも、黒よりピンクが好きなんだよね。」

何それ、なんで言わなかったの、と陽菜が頬を膨らませる。

「かく言う私が好きなアイドル、じつはちよつと昔の人たちなんだ。花の八十二年組、絶対賛箱推し中だよ。え、知らない？ 今度レコード持ってこようか？」

「それを言うならあたしは……。」

チャイムが鳴り終わって、教室に先生が入ってくるまで、私たちの話は終わらなかった。

私は今日も、図書館に行く。そして、これからも通い続ける。神様、嬉しいことがあっても、悲しいことがあっても、どんなときでも私、柿の木図書館へ行くからね。

あとがき

この物語では『柿の木図書館へいらっしやい』（令和二年度）の数年後の世界を描きました。